

Title	山田辰雄氏学位請求論文審査報告
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1979
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.52, No.11 (1979. 11) ,p.102- 107
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19791115-0102

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

山田辰雄氏学位請求論文審査報告

山田辰雄氏提出にかかる学位請求論文「中国国民党左派の研究」の構成は次のとおりである。

第一章 序 論

第一節 中国国民党史概説

- (一) 党の再起と国共合作の時期
 - (二) 国家建設と蔣介石独裁形成の時期
 - (三) 抗日戦争の時期
 - (四) 国共内戦の時期
- #### 第二節 中国国民党史研究の意義
- ### 第二章 第一次国共合作形成過程における孫文思想の変化と展開
- 一九一九～一九二五年——

第一節 問題の所在

第二節 五・四運動前夜の孫文思想

- (一) 五・四運動前夜の孫文思想
- (二) 五・四運動以前の孫文とソ連との関係
- 第三節 孫文思想の変化過程
- (一) 五・四運動を契機とする孫文思想の転換

- (二) 陳炯明の叛乱と国共合作の進展
- 第四節 孫文思想の展開過程
- (一) 中国国民党第一回全国代表大会——連ソ・容共の実体化
- (二) 「中国国民党一大宣言」と『三民主義』講演
- (三) 商団事件と北伐・北上・訪日

第五節 結 語

補論 書評 藤井昇三著『孫文の研究——とくに民族主義理論の發展を中心として——』

第三章 孫文指導下の汪精衛の役割——一九二四～一九二五年——

第一節 問題の所在

第二節 孫文指導体制の構造

第三節 孫文指導下における汪精衛の政治活動

第四節 汪精衛のイデオロギー的立場

第五節 結 語

第四章 中国国民党第二回全国代表大会をめぐる汪精衛と蔣介石

——一九二五～一九二六年——

第一節 問題の所在

第二節 汪精衛・蔣介石協力体制の成立と崩壊

第三節 国民党党路線の發展

第四節 汪精衛の立場

第五節 蔣介石の立場

第六節 結 語

第五章 武漢政府における国民党左派——一九二六～一九二七年

第一節 武漢政府における国民党左派

第二節 国民党三中全会前の党権問題

第三節 国民党三中全会における党権問題

第四節 汪精衛と鄧演達

(一) 汪精衛の立場

(二) 鄧演達の立場

第五節 結 語

第六章 改組派の政治路線——一九二七～一九三〇年——

第一節 問題の所在

第二節 改組派の由来

第三節 武漢政府分裂の教訓

(一) 反共・反蔣の立場の確立

(二) 路線の転換

第四節 改組の提唱

(一) 蔣介石の権力強化

(二) 改組の構想

(三) 『革命評論』と『前進』における党の階級基礎論

第五節 反蔣戦争における改組派

(一) 反蔣戦争と改組派の対応

(二) 汪精衛の「民主主義」論

山田辰雄氏学位請求論文審査報告

(三) 中華民国約法草案と中華民国訓政時期約法

第六節 結 語

第七章 結 論

第八章 最近の日本における中国現代政治史の研究について

第一節 はじめに

第二節 辛亥革命

第三節 軍閥混戦と五・四運動

第四節 中国共産党史

(一) 通 史

(二) 党の成立と第一次国共合作の時期

(三) ソビエト革命の時期

(四) 抗日民族統一戦線の時期

(五) 国共内戦の時期

第五節 中国国民党史

(一) 孫文研究

(二) 党の再起と第一次国共合作の時期

(三) 蔣介石の独裁的権力確立の時期

(四) 抗日民族統一戦線の時期

第六節 大衆運動

第七節 おわりに

中国現代政治史の研究において、中国国民党の研究が極めて重要な要素であることはいうまでもない。それにも拘わらず中国現代政

治史の研究においては、世界的に見てこれまで中国共産党史の研究に重点がおかれ、一九二八年北伐の成功から一九四九年中華人民共和国の成立まで、事実上中国の支配政党であった中国国民党の研究が比較的軽視されてきたことは、それなりの理由はあつたにせよ、中国現代政治史の研究に多くの未知の分野を残してきたことは明らかである。その意味で中国国民党そのものの研究はもちろん、中国現代政治史をあやなしてきた中国国民党と中国共産党との關係についての諸問題も、今後十分に究明されなければならない研究課題であらう。

中国国民党左派とは孫文の思想轉換の過程で形成され、その轉換を積極的に支えてきた集団を指し、蔣介石と対抗して中国国民党史を形成する重要な役割を果したものであるが、これに関する本格的な研究はほとんど存在しないといつて差支えない。山田辰雄氏の「中国国民党左派の研究」は、この未開拓の分野に鋭いメスを入れ、基礎的資料に加えて多くの新資料を綿密に検討し、随所に山田氏独自の新しい解釈を提供して中国国民党史研究の發展に貢献した貴重な労作であつて、本論文の価値は高く評価されなければならない。

本論文は前述したように、全体で八章から成り立つてゐるが、このうち論文の本体をなすものは第一章から第七章までである。

第一章は、中国国民党の運動の發展、イデオロギーと政策、党内権力の所在と大衆的基盤などを中心に、中国国民党史を簡潔にまとめたうえ、著者の国民党史研究に対する問題意識を明らかにしたも

のである。著者は国民党史研究の意義が、とくに(一)中国現代政治史研究の欠落部分を補い、かつ国共両党の背景にある共通の要素を明らかにすること、(二)国共両党の対立面を究明することによつて近代中国共通の課題に対する国共両党の対応の相連を理解すること、(三)国民党左派の研究は蔣介石の国民党と中共との関連を解明することに役立つこと、(四)国民党史の研究は孫文研究に新しい視角を提供すること、にあることを明らかにし、こういつた問題意識に立つて第二章以下の分析にあたつてゐる。

第二章は、第一次国共合作の重要な前提となつた、一九一九年から一九二五年までの晩年の孫文の思想的变化をとり扱つてゐる。国民党左派の出発点はまさにここにあるわけであり、この時期における孫文の三民主義解釈の変化の契機と内容を明らかにすることは、国民党左派研究にとつて必要不可欠である。本章で注目されるのは、従来、比較的不明確であつた孫文思想と新文化運動との關係を詳細に分析し孫文の思想轉換の時期を五・四運動を中心とした一九一八年〜一九年に求める従来の有力説に対して、「大衆を基礎とした反帝国主義、反軍閥の三民主義」への轉換は一九二二年後半であり、同年六月の陳炯明反乱が重要な契機になつてゐることを明らかにしてゐるところである、また著者は、革命的三民主義の原型を一九二四年の中国国民党一大大会宣言、あるいは「三民主義講演」のなかに求める通説に対して、この二つの文書の間には革命運動の大衆的基盤の問題をめぐつて、基調の相違が見出されることを明らかにするとともに、孫文思想が民生主義における労働者農民の位置づ

け、国家の統合過程における党・政府の指導性と大衆の政治参加および民主主義との関係、という点において未完成であり、このことが後の国民党の歴史的発展に様々な分派をつくりだし、事態を複雑化した大きな原因となつてゐることを指摘している。山田氏によるこれらの新しい指摘と解釈は、綿密な考証によつて裏付けられており、今後の国民党史研究について貴重な参考になるものと思われる。

第三章は、このような孫文思想の転換に基づいて実現された第一次国共合作時期において、左派の最も重要な指導者である汪精衛が、孫文の指導の下にいかなる役割を果したかを検討している。従来、孫文の思想的転換にあつて国民党左派が重要な役割を果したといわれているが、それを実証する具体的研究は存在していなかつた。この意味で本章は、汪精衛の存在に注目し、かれが北方軍閥との交渉、連ソ容共政策の推進にいかなる役割を果し、いかなる思想を孫文と共有していたかを解明した本格的業績である。さらに本章で注目されるのは、当時の孫文の指導体制が、一つには客軍と黄埔学生軍からなる軍隊と、いま一つには中共の指導する労農組織によつて支えられており、この二つの勢力に対する対応のあり方のなかにこそ国民党左派の問題点が存在していたことを明らかにしていることである。

第四章は、一九二六年一月の国民党二全大会前後における汪精衛と蔣介石との立場を、その組織的基盤、行動様式、政治路線の視角から検討したものである。注目される結論は、汪精衛が党組織を基

盤として、蔣介石の軍隊と中共指導下の大衆を操縦することによつて革命運動を統合しようとした「統合者」的立場に立つていたのである。蔣介石は軍事力を基礎として中共と対決し、大衆を自己の軍隊の保護の対象と考えた、としてゐることである。いしかえれば、中共が大衆運動の「組織者」であり、蔣介石が「保護者」であつたのに対し、汪精衛は「統合者」の立場に立つていたということである。著者はこのような立場から、反帝国主義における大衆の政治参加、大衆を掌握する中共との関係、世界的規模における反帝国主義的統一戦線（とくにソ連との関係）の問題について、蔣汪両者の政治路線の相違を綿密に検討し、孫文亡き後の国民党内における政治的発展過程を明らかにしている。蔣介石と汪精衛との政治的立場の相違はこれまであまり的確に検討されたことのない問題であり、その意味で本章は著者のこの問題に対する明確な解釈を提供したものであるといつてよい。この解釈は、その後における国民党内のリーダーシップの特徴と、国民党そのものの動向を理解する重要な鍵を提供したものであるとして評価されてよいであらう。

第五章は、一九二七年一月に成立した武漢政府において、国民党左派の果たした役割、いしかえれば武漢政府における国民党左派の権がなぜあれほど急速に崩壊したかを究明しようとしたものである。著者は、前章で述べたように、国民党の政治が党・軍・大衆組織という三つの組織的基盤によつて支えられていたとの前提に立ち、党組織内に主たる基盤をもつていたにすぎない国民党左派の脆弱な立場を実証的に究明している。また国民党左派が、武漢政府末

期に、汪精衛に代表される国民革命論と鄧演達に代表される国民革命と社会革命の同時並行論に分離していった理論構造を明らかにしている。武漢政府崩壊を、国民党左派の体質の分析からアプローチすることは、これまで学界においてほとんどとり上げられたことのない未開拓分野であり、これとやらんで国民党左派分裂の理論的構造の究明も、同様な意味で極めて注目し得るものである。

第六章は、いわゆる国民党改組派の政治路線の問題をとり扱ったものである。いうまでもなく改組派は、武漢政府時代の国民党左派分子を中心として結成された国民党内の反蔣集団を指すのであるが、著者はこれを国共分裂と北伐の完成、国民党三全大会、反蔣成争を通して展開された改組派の政治路線などについて詳細に検討し、(一)政治的には反共反蔣介石の中間的立場をとり、イデオロギー的には一方で中共に対抗して党の階級的基礎を労働者・農民・小ブルジョアジーの連合に求め、他方蔣介石の独裁化に対しては党内外の民主主義を要求したこと、(二)国家の統合過程で蔣介石の中央集権的独裁的方向に対して地方分権的方向を主張したこと、(三)既成の政治勢力を操作することによって自らの影響力を行使しようとする左派の行動様式が依然として改組派のなかに見出されること、を明らかにしている。

本章のように、改組派の政治路線を体系的に分析し、それを中国現代政治史のなかに位置づけた研究はこれまでほとんど存在しなかつたといつてよい。その意味で、この研究は戦前戦後を通じて唯一のものであるといつて差支えないであろう。

第七章で著者は、以上の研究をふまえて国民党左派の研究が孫文思想のもつ様々な可能性を明らかにし、孫文思想の未解決であった問題に新たな光をあてることになることを主張している。また中国革命が蔣介石の国民党と中国共産党に分極化していくなかで、中間的立場をとる国民党左派の立場は、広い意味での第三勢力に共通する問題を含み、中国革命のいま一つの可能性と限界を示したものであることも明らかにしている。その意味で、この論文のテーマそのものは限定的ではあるが、その内容は中国現代政治史のなかへの大きな広がりをもつているといつてよいであろう。

また資料についてみれば従来の基礎的資料のほかに、たとえば、「国民党週刊」、「中国国民党週刊」、国民党系の雑誌「新民国」、さらには本塾図書館に埋れていた武漢政府時期の新聞の切り抜きからなる「燕塵社資料」(全三巻)など新資料を発見して利用するなど、中国語の第一次資料に克明にあたり、さらに既刊の研究論文、未公開のアメリカの博士論文を参照するなど手がたい手法を用いている。

しかし、本論文にも若干の問題がないわけではない。たとえば著者は第五章を除けば、国民党左派の主流を占めた汪精衛を中心とする集団を主としてとり扱い、鄧演達・宋慶齡などの極左派といわれる人々を十分にとり上げていないこと、左派のいま一人の指導者である廖仲愷の役割とその比較が検討されていないこと、国民党左派が改組派となり、さらに抗日戦争において南京政府樹立へと進んだその論理的行動的根拠が不明確であること、などはその例である。

う。

しかし、このような問題は今後の研究によつて十分究明されうるものであり、本論文の価値を損うものでないことはいうまでもない。したがつてわれわれは、本論文が中国現代政治史研究の発展に寄与する価値ある研究業績であることを認め、山田辰雄氏に法学博士（慶應義塾大学）の学位を授与することを適当と考えるものである。

なお、本論文中の第八章は「最近の日本における中国現代政治史研究」の状況を叙述したものであり、山田氏の中国研究に関する学識を示すものである。

昭和五四年九月二八日

主査 慶應義塾大学教授 法学博士 石川 忠雄

副査 慶應義塾大学教授 法学博士（慶應義塾大学）

松本 三郎

副査 慶應義塾大学教授 池井 優